シンポジウム

記憶と想起の空間
——ドイツにおける歴史意識のアクチュアリティ

2008年6月21日(土)，筑波大学

司会　足立信彦・田中洋子

ドイツ記念碑論争 1985–2008　松本　彰
記憶の公共空間に介入するアート　香川　檀
閉鎖後のバウハウス——ナチス・アメリカ・東西ドイツ　長田謙一
記憶と想起の概念に関する一試論　岩崎　稔

はじめに

足立信彦

私たちが，現代美術の作例を記憶研究と組み合わせてシンポジウムをしてみようと思い立った時，そのコンセプトは比較的単純だった。イメージや図像が伝える記憶は，言語による記憶，たとえば歴史書によって伝えられる記憶とはその性質が異なるだろう，それは時代毎の解釈による変遷にさらされることが少なく，したがって支配者の利害に合わせた「歴史」として利用されることも少ないのではないか，という程度の予想から私たちは出発した。だが，以下の記録を読めば明らかなように，その予想は誤っていた。境界線はイメージや図像と言語の間にあるのではない。松本報告と長田報告は，記念碑や建築物の意味もまた，言語による記憶と同様，時と場所の文脈に依存するものであることを詳細に物語っている。そして同時に，真の対立がどこにあるのかもまた示唆されている。

記念碑とは死者，すなわち戦争や虐殺の犠牲者たちをめぐる記憶にかかわるものである。だが，死者をめぐる記憶には二種類ある。死者自身のための記憶と，生きる者たちのために作り変えられた死者の記憶である。また，バウハウスは「死んでいない」と言われる時，それは，バウハウスがその閉鎖後もなお意味の変遷を経験するということだけではなく，それが生ける者たちの抗争ゆえであることをもまた暗示している。境界線はこのふたつの記憶の間を走っているのだ。

香川報告は，この境界線に沿って，造形芸術の例を挙げながら，「対抗モニュメント」が「対抗」たり得る条件，つまり死者自身のための記憶の条件とは何かを探っている。ただ単に反対の記憶を語るだけでは不充分なのだ。反対者は常にその敵に似るものであるから，それではただちに解釈の抗争に巻き込まれてしまう。そこから脱出する途として提示されるのが〈証跡保全のアート〉である。そして岩崎報告は，最近の記憶をめぐる議論を分析しながらこの境界線に関する理論的見取り図を提示し，シンポジウム全体を締めくくる。

最後に，諸報告の後でおこなわれた討論が，残念ながらその記録は掲載できなかったものの，大変刺激に富む活発なものであったことを付け加えておきたい。